

大連の記

赤間神宮名誉宮司 水野直房

私は昭和9（1934）年9月6日、大連神社宮司水野久直の長男として、大連で出生、同16年4月南山国民学校へ入学、この春から小学校から国民学校と名称が変りました。この年の12月8日大東亜戦争が開戦、早速軍事教練が正科に加えられ、樫の木の木銃を手に陸上の演習、オールを手にカッターの演習など運動の苦手な私は、冬の正科であった鏡ヶ池でのスケートも全く駄目で、ずいぶん泣かされました。唯一つ図画だけは得意で、いつも教室に張り出され、軍国少年の私は緒戦にシンガポール沖で英海軍の誇る戦艦プリンス・オブ・ウェールズとレパルス2隻撃沈の報を受け、画用紙3枚を張り大画面を描いて張り出された興奮を忘れることは出来ません。高学年になる頃校舎1階の教室は全てトウモロコシのばら積みの倉庫と化し、授業はこれをスコップでかきまぜる仕事に変りました。この頃大連神社への百日祈願も行われ、最も尊敬してやまなかった恩師岩岡昇先生を始め、若い方々が次々と応召され、戦地に赴かれる毎日でした。戦局は悪化し大連港にも爆弾が落されたのです。大学を出ても仕事の無い青年が内地から続々と大連に移られ、私の自宅はいつも書生さんで一杯でした。

昭和20（1945）年8月15日正午、終戦の詔勅を夏休みで社務所に居た私は父や職員一同と一緒に拝聴、真空管のラジオは雑音が多く聞きとり難い有様でしたが、放送が終るや否や皆涙を流しているのです。子供の私には判りません、すぐ父の居る宮司室に行きますと、父もハンカチを目に当てています。私「どうしたの」父「お国が戦争に負けたのだよ」初めて敗戦だと判ったのです。この年の9月6日私の誕生日を祝って、母がコロケを作り始めた時、台所のドアを開け、肩に自動小銃を掛けた若いソ連兵が2人、俄かに土足で上がって来ました。余りにも突然でビックリしていると腕の時計を指差して、「ダワイ、ダワイ」と言います。お金や時計を出せという有様に、当時3才の末弟は大泣きです。これを見た兵士はいささかひるんだと見えて、オーマレンキ（おゝ坊や）と言い頭をなでて立去りました。この日から大連は暗黒の街と化したのです。爾来いつも私の誕生日には何か起る……というジンクスが始まりました。常に白衣袴で通した父のもと、大連神社は暴動に遭いませんでした。しかし密告などで八路軍に3回投獄された父は、ソ連軍司令官に舞楽を見せるや日本の古典に驚嘆し、毎週日曜日にソ連軍

高官が相次いで参観、ついにソ連兵慰問の軍楽隊一行がやって来てビックリ。同時に彼らの唄うボルガの船歌は流石に本物、未だに忘れることはできません。この間、日本の捕虜脱走兵もずいぶん保護し無事に帰国させました。食糧を得るために衣類を売りに広場に立ち、中国人から餅子（ピンズ＝トウモロコシのパン）を仕入れて綿袋に包み、広場へ売りに行きました。売れずに半泣きになっている私を見て近くのお店の主人が全部買って下さり勇躍帰宅して父に報告したことなど、敗戦後の悲惨な大連の記憶は今も生々しく蘇ります。国民学校も中国人の子供らに暴行される為、自然廃校になりました。

昭和 22（1947）年内地への引揚げが開始され、大連市民は 3 月に集中、ソ連軍保護のもと大連神社御神体を背に負い 7 家族 51 名の神職家族全員 3 月 11 日高砂丸（1 万トンの病院船）で大連港を発ち、14 日未明佐世保沖に碇泊、同日ハシケに乗せられ針生島の収容所（元海兵隊兵舎）に入り初めて祖国日本の美しい山を仰ぎ、土を踏んだのです。戦後初めて頂く白いお米の御飯に味噌汁、ここまで書いて来ますと、もう涙があふれて仕方ありません。80 才を迎えた今もこの日の感動をどうして忘れることが出来ましょうか。

父と共に一家は一先ず福岡の筥崎宮に幡掛正木宮司様の御配慮を得て 2 ヶ月、戦災に焼失した赤間神宮の御復興を托された父と共に下関に着任したのが 6 月で

した。既に 6・3・3 学制の開始で新制中学校の第 1 期生。焼け残った 1 棟の廻廊から始まりました。お弁当を持って行けなくて昼休みは帰宅し、大急ぎでおかゆをすすり、学校へ戻る……という毎日でした。何しろ廻りもみんな焼け出されているのですから。履物もワラ草履、学生服も着たきり雀でした。小学校の教室を借りてのスタート。しかしみんな明るかった。それこそノートや鉛筆も無かったけれど、勉強しました。先生方も若く一生懸命教えて下さいました。3 年生の時にやっと木造 2 階建ての校舎が竣工。高校は当初地元の県立校に合格したのですが上京の志止み難く、2 年の夏休みに編入試験を受けて東京都立駒場高校に進み、憧れの東京生活が始まりました。何と高校で大連南山校の同級生と再会、担任は一高東大御出身で日本史の菱刈隆永先生。何と御尊父は初代関東軍司令官で和平派の菱刈隆閣下という実に不思議なめぐり合せを体験して卒業。父祖の道統継承の為、国学院大学へ進み、恩師鈴木敬三先生の御指導を仰いで有識故実に没頭、傍ら宮内庁楽師東議文隆師に龍笛、笙を楽長蘭広茂先生に学び、大学祭では戦後初の舞楽公演を実現した感激は今も忘れることが出来ません。卒業と同時に宮内庁書陵部に拝命、貞明皇后実録の編修と皇室制度の調査に従事、正に大学院の如き貴重な体験を経て、昭和 34（1959）年 4 月 10 日、時の皇太子殿下（現天皇陛下）御成婚の御儀を宮中賢所でお仕えした後、

帰郷し戦災復興に邁進。

やがて昭和 24 年に本殿が再建出来、父はかつて志した画業を原点に、赤間神宮戦災復興絵図を描いて、御祭神安徳天皇に因む龍宮造りの水天門から社殿まで、大洋漁業の中部利三郎翁御支援のもとに昭和 40 年完成。

大連神社の御神体は先ず小祠を建立して宮崎宮からお遷し申し上げ、伊勢神宮の御遷宮に依る撤下古殿舎 1 棟を賜はって整備され、昭和 55 年春、貝島邸内の日の本神社を移築し芽出度く竣工いたしました。

大連神社



大連神社本殿（赤間神宮境内の北東側に鎮座）

撮影日：2013年12月7日

撮影者：菅野智博